

西洋囲碁の歴史

ここ四千年来、もっぱら東洋のゲームであった碁が、ヨーロッパに伝えられたのは、そう古いことでなく、たった百年そこそこしか経っていないということである。

ただし、東洋に碁という盤上で行うゲームがあるということは、四百年ほど昔からヨーロッパでも、ものの本に書かれていたというが、それは単なる知識、ないしニュースとして知られていたに過ぎない。

本格的に、碁という文化が輸出されたのは、明治十四年（一八八一年）のことだという。当時、わが国は三百年間の太平の眠りから覚め、欧米列国に追いつくために、いろいろな分野で外国人を招いて科学や技術を導入していたが、化学の教師として日本に来ていたドイツ人にオスカール・コルシエルトという人がいた。

この人がたまたま碁を覚えたのが欧州碁学ことはじめということになる。現在、囲碁人口と
いうことでは、ヨーロッパでは何といっても西ドイツだが、これはやはりスタートが早かった

ことによると思われる。

さて、このコルシエルトさん、どうせ碁をやるなら、本格的に勉強しようと考え、プロ棋士をさがし求めていた。これは、ものごとを学ぶのには、まことに正しい態度であると思う。よく、私の碁はまだへボだから、専門棋士などもつたいない。とりあえず近所の隠居さんで充分だなどという人がいるが、これはとんでもないことで、ヤブうぐいすを師匠にしたうぐいすのひなは、悪い癖がついてしまつて一生涯直ることがない。言ってみれば、私の病氣は至つて軽症であるから、近所のバアさんのまじないで充分だというようなもの、命を大切にする人は、名医が手近にいればこれにかかるのにこしたことはない。

コルシエルトさんが最初に訪ねたのは、碁の家元である井上家の十三代目の当主、井上因碩という六段(当時)の先生だった。井上家は、代々、因碩を称していたから、この因碩さんは、本名が松本錦四郎であつたことにより、松本因碩と呼ばれている。

さて、コルシエルトさん、グーテンタークと玄関に入りこみ、スミマセンガ碁ヲ教エテ下サイと頼んだのだが、因碩さんの方は、変な外人が来た、面倒くさいというのであろう。ある書物の表現によれば、

「毛唐に碁を教えてもしようがない」

と断ってしまったという。因碩さんは武家の出身だったから、ことによると攘夷思想でも持っていたのかも知れない。

コルシエルトさんがここであきらめてしまえば、ヨーロッパの碁は多少進歩が遅れたろうが、幸いなことにこのドイツ人はねばり強かった。次に訪ねたのが、当時の新興の囲碁結社である方円社の総帥、村瀬秀甫という大先生だった。

秀甫先生は段は八段で終ったが、歴史に残る囲碁の名手であり、その上に人間もケタ違いに大物だった。この当時、中江兆民という高名な思想家がいて、『一年有半』という本を書き、その中で、近代の非凡人として三十一人を紹介しているが、藤田東湖、坂本竜馬、西郷隆盛らに伍して、一介の碁打ちである村瀬秀甫ありというわけだから、いかに大人物だったかが分る。秀甫先生、コルシエルトさんの希望を聞くと、大喜びで迎え入れた。碁はこれから世界にひろげねばならぬ。こちらから頼んでも習って貰いたいところだったというわけである。

秀甫先生は一生懸命に教えたらしい。初歩的な定石、布石、死活などなど、コルシエルトさんは新知識の取り入れに懸命だった。翌年、彼は故国ドイツに帰ったが、この村瀬秀甫直伝じよてんを『碁の理論と実践』と題して出版してくれたのである（一八八一年）。さすがに秀甫直伝じよてんだけのことはあって、この本はなかなか立派な内容であり、百年後の今もなお版を重ねているそうで

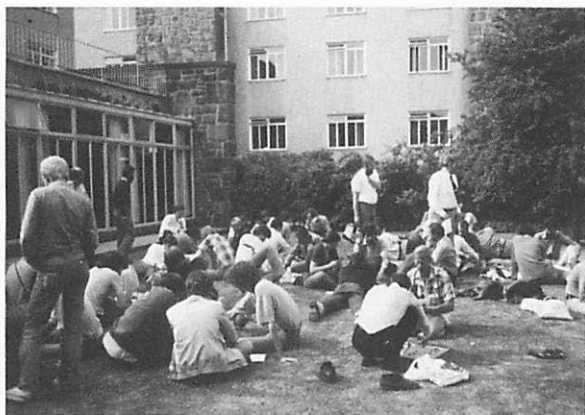
ある。

以来百年、碁は全ヨーロッパに根をおろし、どの国にも囲碁協会があり、碁会所がある。ただし、欧州の碁会所はレストランや喫茶店の一角を借りていることが多く、それも毎日開かれているわけではない。何といたっても囲碁人口はまだ少ないから、例えば、金曜日はこのレストランで、日曜日はあの喫茶店というように、青い瞳の碁打ちが碁盤を抱えて集まってくるのである。日本と違って席料(入場料)は不要だが、多少の飲食代を払ってレストランの店主と共存共栄をはかる必要がある。

ヨーロッパ・ゴ・コンGRES

毎年七月下旬から八月月上旬にかけて、ヨーロッパ最大の囲碁トーナメントであるコンGRESが行われる。これは、欧州では最も歴史の古いものであり、一九八五年には第二十九回目のコンGRESが、オランダで行われた。

ヨーロッパの碁の会は、日本で行われる碁会とは全く別の物だと思わねばならない。日本のそれは、朝から始めて夕方まで、バタバタと五、六局も打って、ハイ、ではまた来年という忙



部屋の中から庭へ進出した碁打ちたち。これは局後の研究，感想が主たるものだ(1983年夏，エジンバラ，ヨーロッパ選手権戦にて)。



欧米の碁の会には女性が多勢参加する。

しただが、ヨーロッパの碁会は大きいものになると一週間。このヨーロッパ・ゴ・コンGRESに
至っては、十五日間をかけてのんびりと碁を楽しむ。

全欧州から三百人ほどの碁打ちが集まり、メイントーナメントは一日に一局だけ、十五日間
の間に九局だけ打つ。それで、欧州の一位から三百位までが手ぎわよく決定する。

いわば、全欧州の碁打ちの、夏のバカンスである。会場は各国まわり持ちで、それぞれの国
が自慢する観光地で行われる。ヨーロッパは比較的緯度が高いから、夏は夜の十時ごろまで明
るく、朝は四時ごろには夜が明ける。碁にあきたら、水泳、サイクリング、ドライブ、テニス。
ワイングラス片手にトランプ遊びに忙しい人もいる。もちろん寸暇を惜しんで碁で徹夜する碁
狂も少なくない。

私は、ここ数年来、夏になると手弁当で欧米に普及指導に出かける。一九八五年からは、ア
メリカでも、The U. S. Go Congress が始まった。これらの碁の祭典に顔を出してみても、碁とは
このように楽しむのが本当だと、つくづく思うのである。

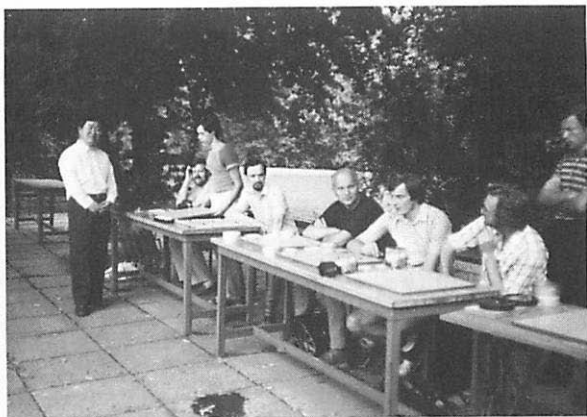
日本での仕事をほうり出し、手弁当で外国をかけ歩く私を見て、私の友人の何人かは、中山
はアタマがおかしくなったのではあるまいかと心配してくれるが、私は気が確かなつもりでい
る。外国には私が顔を知っている青い眼の碁打ちが何百人もいるし、ナカヤマの弟子と称する

連中が百人はいるだろう。私はいつでも彼らの中にもぐり込む。原則として、ホテルに泊ることはない。碁は、もはや世界中にひろがっているのである。碁打ち人間、いたるところ青山ありだ。

ちなみに、一九八五年のヨーロッパ・ゴ・コンGRESに参加した碁打ちを、国別に列挙してみよう。

オランダ	一〇四人	スイス	四人
西ドイツ	七六人	ベルギー	三人
フランス	二五人	ルクセンブルグ	二人
イギリス	二二人	スペイン	二人
イタリア	六人	ポーランド	二人
デンマーク	四人	ユーゴスラヴィア	二人
ハンガリー	四人	オーストリア	一人
フィンランド	四人	ノールウェイ	一人
スウェーデン	四人		

以上一七か国二六六人だった。このほかに、東ドイツ、チェコスロヴァキア、ソ連などでも大いに盛んなのだが、出国手続が不可能であったり、面倒だったりする関係で参加者はいなか



東ドイツの公園で、同国のベストテン上位選手を相手に十面打ちする筆者。棋士で東ドイツに行った人はいなかったとかで、一同大騒ぎだった(1983年夏)。

った。今年(一九八六年)は、会場が共産圏のハンガリー(首都ブダペスト)であるから、東欧の連中も大挙して参加することだろう。

ヨーロッパ・ゴ・コンGRES。それは、まさにコンGRES(会議)の名にふさわしいと思う。日本で考えているような半日や一日の碁会ではなくて、壮大きわまる碁打ちのバカンスだ。もし、あなたが碁打ちをもって任じておられるならば、一度、参加されると面白い。ただし、ひとことだけつけ加えておくが、大会会場は禁煙であるから、ヘビースモーカーにとっては少々苦しい。ヨーロッパの碁狂の中にも、もちろんヘビースモーカーはいるが、これらの人達は、一手打ったびに外に出て、スパスパ、パクパクと金魚が酸欠になっ

たような動作をする。これは、アメリカの कांग्रेसでも同じことで、もしあなたが優勝を狙うなら、まず禁煙しなければならぬだろう。

囲碁人口と実力

欧米の囲碁人口はどれくらいになるだろうか。これは日本のそれと同じく、正確な数を把握することは非常に難しいが、私の過去数年にわたる調査や感触によると、だいたい次のような数字になった。

アメリカ	八〇〇〇〇人	カナダ	五〇〇〇人
西ドイツ	三〇〇〇〇人	オーストリア	五〇〇〇人
オランダ	二〇〇〇〇人	東ドイツ	五〇〇〇人
南米	二〇〇〇〇人	ポーランド	四〇〇〇人
フランス	一五〇〇〇人	スイス	三〇〇〇人
イギリス	一二〇〇〇人	チェコスロヴァキア	三〇〇〇人
ユーゴスラヴィア	一〇〇〇〇人	スペイン	三〇〇〇人
ソ連	一〇〇〇〇人	デンマーク	二〇〇〇人

スウェーデン	二〇〇〇人	ベルギー	一〇〇〇人
ニュージーランド	二〇〇〇人	イタリア	一〇〇〇人
ルーマニア	二〇〇〇人	フィンランド	五〇〇人
オーストラリア	二〇〇〇人	ノールウェイ	五〇〇人
ルクセンブルグ	一〇〇〇人		

人口の割に碁が盛んなのは、オランダとユーゴなどであるが、しっかりした会長さんと熱心な幹事さんがいれば、囲碁人口は爆発的に増加する。

例えば、一九八三年に私がチェコスロヴァキアに出かけたときは、チェコの囲碁人口は僅かに三百人。中にはせいぜい二百人という人もいたくらいである。それが、二年たった現在、彼らは胸を張って三千人はいますと答える。

チェコの囲碁協会会長は、有名なカレル大学の名誉教授であるドゥシャン・プロコップ(Dr. Jan Prokop)先生だが、メンバーにはダニェック五段、ヴィンケルフェーフェル四段など、なかなかの強手もいて、ダニェック五段は世界アマチュア選手権(毎春、日本で行われる、日本棋院・日本航空主催)で六位に入賞したことがある。総体に若い人が多いし、学者の卵が多いのもこの国の特徴。碁はきわめて上品な競技と解されているようだ。



チェコの最強選手団。右からダニェック五段、ヴィンケルフェーフェル四段、コチャンドレ三段、ホレチェック三段。1983年夏、プラハにて。

プロコップ教授の口ぐせは、

「碁は愛です。もし、世界の指導者が碁を知っていたら、第二次世界大戦のようなことは起らなかったでしょう」

と。私も全く同感である。碁は、相手の立場をよく理解し、こちらも最善をつくすゲームなのだから……。

さて、欧州の碁打ちたちの実力だが、これはなかなかもって、たいしたものである。

いちばん強いのは、オランダのシュレンパー七段。彼は日本棋院に来て院生（プロの養成機関の生徒）の修行をし、もう少してプロ初段になるところだったから、その実力は折紙つきである。シュレンパー君に対抗するの

は、韓国人でケルンの大学に留学しているヨーさん。昨秋の欧州第一人者決定九番勝負では、七対二でヨーさんが優勝し、五千ギルダー(約四十万円)の賞金を得た。聞くところによれば、ヨーさんも小さいときに韓国棋院の院生だったとかいうから、並のアマチュアとは鍛え方が違うのだろう。ヨーさんは人柄も実に立派で、ドイツ囲碁界ではたいへん人望がある。

イギリスのマクファディアン六段、オーストリアのハシベーター六段、フランスのムーサ五段などは、トップの二人に紙一重の差で続く実力者である。若手のパリパリではフランスのコルメス四段、西ドイツのリットナー四段、ハンガリーのポチャイ四段などで、五年、十年の後には欧州の碁界を背負って立つだろう。いずれも立派な人物ばかりだ。

ところで、欧州の段位だが、これは国によって多少の違いがあるけれど、総体にたいへん辛い。辛すぎるくらいである。通常、昭和六十一年現在の日本のアマチュアの初段は、プロの私に対して、マア八子(もく)くらいであるが、オランダのアマ初段は五子(もく)、フランスのアマ初段は六子(もく)でいい勝負になる。西ドイツは今のところそれよりも少し甘いけれど、オランダ、フランスとバランスをとるために、囲碁協会が昇段規定をきびしくしたという話もあり、いずれ辛い段になるだろう。

だから、もし日本のアマ諸兄がオランダで打つときは、五段なら三段、初段なら二級くらい

に申告しておけば、まあ、あまり大恥をかかないですむだろう。

欧米では、あらゆる公式戦の試合結果がコンピュータに入力され、段位が厳正に決定されている。例えば、昨年（一九八五年）の米国東部選手権戦では、参加者中の最高段位者はロン・シュナイダー選手の六・三八段。続くはタカオ・マツダ選手の六・一〇段といった具合。もちろん成績が悪ければどんどん下ってくる。この点、彼らの考え方はたいへん合理的だが、これは考えてみると当然のことであり、日本のように自分勝手に段を決めては、ハンディキャップが目茶苦茶になって、せっかくの碁会が楽しくなくなってしまう。碁は、強い者も弱い人も一緒に楽しめる素晴らしいゲームなのだから……。

チェスにとって替るもの

ヨーロッパではチェス（西洋将棋）がたいへん盛んである。碁もかなり盛んになったことは既述した通りだが、チェスに比べると、まだまだで足もとにも寄れない。

チェスの愛好者は、チェスのことをキングオブゲーム、すなわち、あらゆるゲーム類の帝王と自称して威張っている。喫茶店やレストランにはチェスの会と碁の会が共存しているが、

彼らは碁を見ると、そんなへんてこりんなゲームを止めて、チェスをやろうよと誘いをかける。しかし、もし、彼らチェス愛好者が、ひとたび碁を覚えたら、もう二度とチェスの世界に帰って行かない。なぜだろうか。

私は、外国でよく話すのだが、この地上には、チェスをはじめとして、日本、韓国、中国、インドなど、およそ国が百あれば百種類の将棋がある。いわば、将棋は人間が作ったものである。碁は、地上にただひとつ。これ、すなわち神の作りたもうたものであろう。と言うのだが、すると聴衆は一斉に机を叩き鳴らして賛意を表し、口々に「ナルホド」とか「イエース」とか叫ぶ。チェスと碁では既に勝負がついていることを、これらチェスから碁に転向した全員が知っているのだ。

西ドイツのハンブルグ市に、ウーヘ・ピーンケというチェスの強手がいた。日本でいえば、県代表くらいの強さだったというが、彼はひとたび碁を覚えたと、これに熱中し、僅か一年半でアマチュア三段の力になってしまった。ハンガリーのポチャイ・チボー君は、一九八二年には私に聖目碁(三級くらい)だったが、八五年にはもう四段でハンガリーを代表する打ち手になっている。ヨーロッパ人は、ひとたび熱中したら、集中度が怖ろしいくらいで、アツという間に上達する人が少なくない。

そこで私は思う。あと二十年か三十年で、碁は間違ひなくチェスにとって替るであろう。キングオブザゲームは、実は碁であるという日が来るであろうと……。

さて、えらそうなことを言ったが、実は私はチェスを知らないのである。日本の将棋なら、碁よりも早く子供のときに覚えた。将棋の実力は、まあしろうとの五、六級というところか。

泉谷初段(囲碁プロ六段)、安倍初段(囲碁プロ八段)らの名誉初段連といい勝負である。

一九八三年の夏、私はイタリアのミラノで普及活動をしていた。私の隣りではチェスをやっている人がいた。眺めていたら、そのイタリア人が、チェスも面白いよ、一番指そうよ、とのたもうた。イヤ、私はルールを知らないと答えたら、教えてやるといふ。聞いてみると、日本の将棋とよく似ている。桂馬もあるし、角も飛車もある。これなら指せぬこともあるまいと思つて始めてみた。

結果はどうだったか。一枚ずつ駒をハガされて惨敗の棋勢だったが、終盤の詰将棋みたいになつたとき、私のクイーン(飛車と角の働きを兼ねた駒)をチョイと浮いてみたところ、これが偶然、敵王の必死になり、あきれたことに勝ってしまったのである。

イタリアのわがお弟子さん達は目茶苦茶に喜んで、チェスの天才ナカヤマにと称して、立派なチェス盤と駒をプレゼントしてくれたが、こんなバカなことがあつてよいのだろうか。勝て

ば面白くなって熱中しそうなものだが、あれ以来、チェスは全然やる気がしない。

一番問題なのは、ドロー(引分け、千日手)になる確率が非常に高いことである。チェスは日本の将棋と違って、取った駒を使えないから、そのうちに双方の駒が減って来てお互いに王様が詰まなくなる。昨年(一九八五年)の世界選手権戦では、何と、挑戦者が五勝三敗十六引分けで、漸く結着がついたというが、引分け率が七割近くもあるのは、明らかに欠陥ゲームと言わざるを得ない。

この点、碁はうまくできていて、無勝負になる確率はないとは申せぬが、限りなくゼロに近い。私はチェスを知らないけれど、チェスからの転向者が口をそろえて力説するところである。

大失敗も楽し

五十歳を過ぎてから、フラリフラリと外国を歩きまわるのは、いい度胸だねと友人に冷やかされるが、慣れてしまえば何ということもない。私にとっては、日本棋院で打つ手合(てあ)いⅡプロの試合のこと)の方がよほどドキドキする。手合では年じゅうひどい目にあわされるが、外国ではさほどひどい目にあつた記憶はない。ただ一度、例の大韓航空機がソ連のミサイ

ルで撃墜されたとき、ちょうど同じ日に同じアンカレッジ・成田間を、事件の直前にブーンと飛んで、ヒヤヒヤしたこと以外は……。

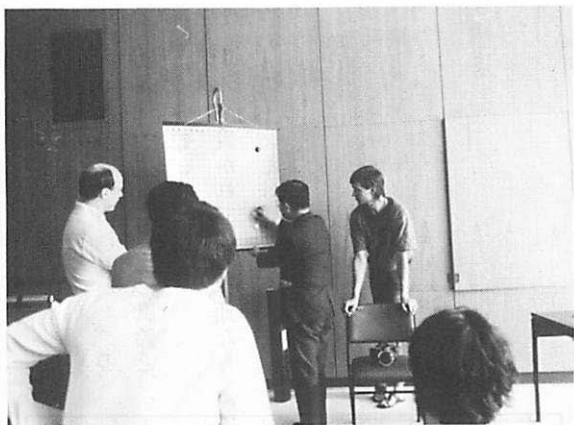
とはいえ、小さな失敗や、バカバカしい笑い話は山ほどもある。紙幅の関係であまり寄り道もできないが、二つばかり白状しておこう。

やはり同じ一九八三年夏、私は西ドイツ北端の港町、キールにいた。キールラーヴォツヘ（キール週間）を記念する碁会が開かれて、七十五人ほどの碁打ちが集まっていた。この大会はデンマークのフランク・ハンセン教授（五段）が優勝し、千マルク（当時、日本円で十万円くらい）の賞金をせしめた。欧州の碁会は、賞品も出るが優勝はたいてい現ナマである。なお、このハンセン教授は日本語の達人であり、対局前に白か黒を決める握りでは、必らず、

「私はハンセン（半先）奇数なら黒で打ちますという意思表示です」

という。だからハンセン五段に白を持ちたければ、石を一個握って「半」にすればよい。なお、教授はもちろんデンマーク囲碁界の第一人者であり、日本語のカラオケを唱わせると、これはもう七段か八段くらいの芸。どこの国にも親日家はあるものだが、碁を打つ人は例外なく親日家だと見て、まず間違いない。

そのキールラーヴォツヘで、私は十面打ちをやらされたが、これが世にも怖ろしい十面打ちだ



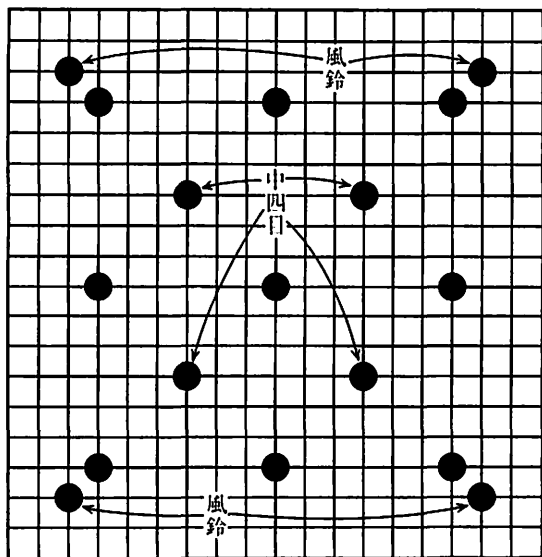
キールの碁会における局後の解説風景。左：ハンセン五段，中央：筆者，右：西独の碁狂ステファン四段。

った。日本では、碁会所へ行ったり、碁を打ちますと言える人は、最低でもアマチュアの七、八級以上だろう。しかし、欧州では、二十級、二十五級という全くの初心者でも、イソイソと碁会に出てきて楽しむから面白い。もっとも、これらの二十級さんは猛烈に熱心であり、半年後には五、六級になっているのは確実ではあるが……。

さて中山五段、十人を相手にして打ち始めようとしたが、思わずアッと声を呑んだ。何と、十人が十人とも、聖目風鈴中四目。すなわち十七子置いて向ってきたではないか。

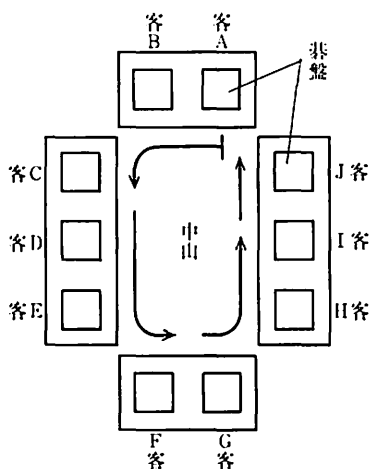
まあ、相手が初心者だから、打てぬこともあるまいと思って打ち始めたのだが、途中で困ったことが生じた。こういうときは、サイマルテ

聖目、風鈴、中四目のハンデの
 図——聖目(九子局)の上に風鈴と
 中四目を加える。
 これだけ置かれては、普通なら
 白が全滅してしまう。



ニアスゲームズと言って、左の図のように机を並べ、Aから順にB、Cと打ってグルリと一順し、またAにもどるのである。相手はノンビリと碁を楽しめるが、こちらは忙しい。何しろ、敵の十倍のスピードで打ち、かつ走り回らねばならないのだから……。

それでも、序盤のうちはまだよかった。中盤になって石が混んでくると、客人がどこに打ったか判らんのである。



サイマルテニアスゲームズ

もし、相手が初段とか三級とかいうのなら、だいたい法に叶った手を打ってくれるから当方も瞬間的に予想がつく。ところが、初心者の手は奇想天外(?)だから、わが軍としては見当もつかない。やむなく、

「どこへ打ちました？」

と聞けば、相手も大いに閉口し恐縮して、

「オー……イッヒ、ハーベ、エス、フェアゲッセン」(忘れちゃった)

と来たものである。中には、イヤ、まだ打っ

ていないかも知れぬと、一度に二手打つお客さんも出てくる始末だった。爆笑につぐ爆笑でおかしいやらバカバカしいやら、こんな苦しい碁は、もう二度と打ちたくない。

イギリスで飲んだサイダーにもひどい目にあわされた。

ロンドンの西、五十キロくらいのところにレディングという都市があるが、そこで、まず一時間ほど大きい磁石碁盤で講義をし、しばらく休んで例の多面打ちをすることになった。

一時間もしゃべっているとノドがかわく。何か飲物が欲しいと思っていたら、幹事さんが、「何か飲むものを欲するか」と聞いてくれた。イエスと答えて、「汝の手に持っている赤い飲物は何ものなりや」と問えば、「これはサイダーなり」という。オーオー、サイダーは私も大好きである。それを一丁たのむとやったが、このサイダーは日本のサイダーと少々違うのを知らなかつた。

そのサイダーは、少し甘くて口当りがよい。かなり大きなジョッキを、日本のサイダーと同じ要領でゴクゴクゴクと飲み干したが、しばらくすると、どうも様子がおかしい。

体がフワリフワリと宙に浮いた感じで、並べられた碁盤に添ってまっすぐに歩けないのである。そのうえ、一つの石が二つにも三つにも見え出したから、こりゃ酔っぱらったなと氣

がついたが、あとの祭りである。

後で聞けば、イギリスのサイダーは、アルコール度が十度くらいはあるということだった。全く下戸の私がガブ呑みしたのだから、酔っぱらわなければ不思議というものだ。

まっ赤になって目をこすりこすり碁を打っている私を見たイギリスの紳士たちは大喜び。これはチャンスである。ナカヤマをひどい目にあわせるべしと総攻撃をかけて来たものである。さて、私はどうなったか覚えていない。これはとにかく短期決戦で行くしかないと思ったので、できるだけ勝負が早くつくように相手の石を取りに行ったことだけは覚えている。ともかく打つことだけは何とか打ち終り、宿舎に帰ってバタンキューである。

翌日、幹事さんに会った。オイ、きのうの碁はどうだった。まさか、わが方が全部負けたんじゃないあるまいかと聞いたところ、彼はつまらなそうにプイと横を向き、

「ユー、ウォン、オール」

と言った。ヘエー驚いた。全部勝ったなんて、今でも信じられないのである。

その日、イギリスの紳士たちはワイワイガヤガヤとうるさく議論していた。昨日はナカヤマにサイダーを飲ませたが量が少な過ぎた。もっと飲ませなければハンデが適当でない。と一人が言えば、いや、それは悪手である。飲めば飲むほど彼は強くなるに違いない。エネルギーを

補給するなどとはもつての外である、と一方が反論する。

結局、二日目はシラフで対局したが、どうしたのか、一局だけ負けてしまったのを覚えて
いる。

念の為に申しあげるが、イギリスでサイダーを飲みたくなったら、あなたは、必ず、レモネ
イドと言わねばならない。サイダーと言えば、口あたりのよいおいしいリンゴ酒が出てくるか
らである。ああ、私はもう一度イギリスに行き、おいしいサイダーをチビリチビリと、二時間
ほどもかけて楽しんでみたい。

海外普及について一言

百年あまりの昔、西洋にも囲碁をということで、飛び込んできたドイツ人に大喜びで碁を
教えた村瀬秀甫の志は、いま漸く大きな実を結ぼうとしている。オランダあたりに旅行した人
は、(Go)という言葉は、もはや彼ら外国人にとって日本からの外来語ではなく、普通名詞と
なっているのに気付かれるだろう。

日本からは、碁のほか、茶道、生け花、歌舞伎、相撲、などなど、もろもろの文化が、ヨ



西独ハンブルグに住むステファン・ブディッヒ四段は大変な碁狂。夏の日、「碁」のペンダントをセロテープで胸に貼りつけて日光浴をし、ごらんの通りの始末。「ドウデス、ナカヤマセンセ」、当方、ただ啞然。

ヨーロッパ人の関心をひいている。これらは、もちろん碁と同じように奥深いものではあるが、大相撲や歌舞伎などは、眺めてワンダフルというだけにとどまり、自分で実行するというわけにはもちろん行かない。お茶や生け花を習った場合、一日か二日もかけた結果、ウン、これでオーケーよ。分りました。という浅い所で終了し、日常生活に深くかわるところまでは行かないのが普通であろう。われわれ日本人でもそうなのだから……。

これが、碁の場合はどうだろう。ひとたび夢中になってしまえばしめたもの。もう、こっちのものだ。奥さんや子供を引っぱりこんで、猛烈におっぱじめるのが彼らの定石である。上達したいので碁の本を買いこみ、辞書

を備えて日本語の勉強を始める。勢い、日本について理解が深くなり、友好的になる。少なくとも、碁を知っている外国人なら、

「日本は中国のどの地方に存在するのか」

などとは見当違いの質問をすることは無い。

アメリカでは、一家に二台以上の自動車があるのは常識だが、碁打ちの場合、一台はたいはいホンダとかトヨタとかの日本車である。貿易問題がやかましい当節、お前さんはどうして日本車を買ってアメリカの貿易赤字を増やすのかと冷やかすと、

「エッ、アメ車デスカ。ガスヲタクサン食ベルネ、トラブルモアルネ。ボクノ日本車、十年ノアイダ、病氣ナシヨ。日本車悪クナイ。デトロイトノ政治家ヨクナイ」

まるで日本を代弁するような反論だった。それにしても日本語の達者な外人もいるもので、「アメ車」などという日本語のスラングまで知っていたのには一驚したものである。

ここで私はつくづくと思うのだが、政府、財界は、もう少し碁の海外普及に力こぶを入れるべきではないだろうか。いままでに、外務省の外郭団体である国際交流基金の理解協力がある、毎年、棋士の欧米派遣は細々と続いているが、何といても予算が少なすぎる。毎年、せいぜい二千万円も予算を増額してくれれば、わが国のためにどれほどのPRになるかと思わ

ずにはいられない。欧州に日本のプロ棋士が常駐して欲しいというのは、彼らにとって最高の希望なのである。こんなに安上りで日本のイメージアップに効果のあることは、他にあり得ないと思うが、どんなものだろう。

私は、これまでに海外の十三か国を囲碁普及のために歩き回ったが、チェコ、西独、フランス、アメリカなどで、永住してくれないかと談判に及ぶ青い瞳の碁狂に出あっている。その中の一人である、アメリカのポストンに住む大学教授のドン・ウィーナーさん(Don Wiener 五段、私に三子)は次のように迫ってきた。

「アメリカ国内ならどこでもよい。もし、センセイが来てくれたら、私は次の日には、その隣の土地を買って住むことにする。本当だよ」

彼らの願いがいかに切実なものかがお分りいただけよう。

ここ数年来、中国、韓国、台湾の東洋囲碁先進国が、各国の政財界のバックアップで西洋への囲碁普及に乗り出してきた。例えば、昨年(一九八五年)のヨーロッパ・ゴ・コンGRESの例をとれば、韓国は二人の高段プロを通訳つきで、中国は長老格の羅建文七段と新進の女流プロ郭鵬五段をチームリーダー通訳つきで送り込んでいる。

わが国はどうかというに、コンGRESの直前になって、中山典之という中年のプロ五段が行

くことに決った。しかも、個人的にアメリカへ行くそうだが、ついでにヨーロッパにも立ち寄って欲しい。もし都合がつけば、飛行機代だけは支給する。という計画性のなさ、熱のなさだった。コンGRESの日程などは、一年以上も前から決っているのだが……。

碁は、過去百年間、われわれの先輩の努力で漸く西洋に定着しつつある。しかしながら、中国や韓国の熱の入れ方を目的あたりにした私の感想は、いずれそのうちに、(G O)は(ウイチイ)(中国語)か、(パドウ)(韓国語)になるだろうと思わずにはいられない。目下のところ、碁は世界中のどこへ行っても(G O)であり、用語も日本語がそのまま使われているけれども……。

結論として、西洋への囲碁普及活動は、もはや完全に中国、韓国との協力時代に入ったといえる。G N Pで僅か日本の十五分の一にしか過ぎない韓国や、これから国民生活を向上させねばならぬ中国が、苦しい中からも囲碁使節を欧米に送り続けているのは、囲碁が偉大な文化であり、国の相互理解に役立つからに外ならないと思う。

よって、わが国としては、今後、ヨーロッパ・ゴ・CONGRESのような国際競争の場には、然るべき熱血漢を派遣し続けて欲しいと思う。とかく海外旅行といえれば物見遊山の傾向ともなり、一日に三、四時間程度のおつとめをすまじさえすればあとは自由時間。せつかくヨーロッパに来たのだから命の洗濯をしまししょうというのは人情だが、そんな甘い簡では欧米の碁打

ちたちとの心の交流もできないし、日本文化普及の第一線にも立てないだろう。

昨年（一九八五年）のヨーロッパ・ゴ・コンGRESで、夜の十二時ごろ、まだ会場にいて熱心に指導碁を打っている中国の美人棋士、郭五段の姿があった。これを見て、私と対局していたヨーロッパの一碁狂が私に語りかけた。

「中国のプロは、献身的で本当にすばらしい。それに比べると、日本や韓国のプロは、まるで観光旅行だ」

どうやら彼は、私も日本のプロであることを忘れていたらしい。私は、なるほどなるほどと一応は同意したものである。

心の交流

碁の別称に「手談^{しゅだん}」というのがある。私の大好きな言葉である。

口でものを言わなくても、打ちおろす一手一手が雄弁にお互いの心の中を語っているわけで、沈黙が深ければ深いほど、手談はいよいよ奥深いものとなる。

世の中には、往々にしてペラペラしゃべりまくりながら碁を打つ人もいるが、私どもに言わ

せれば、よくもまあ気が散らないで碁が打てるものだと思う。碁は、やはり沈思黙考し、想成つてから初めて碁石を一粒だけつまむべきものだ。

とはいえ、いつもにぎやかに碁を打っている人に対し、急に静かにしろと言ったところで無理な話だ。ちょうど、ガード下に住んでいた人が静かな山奥に引っ越したようなもので、あまり静かで調子が狂う意味もあるだろう。しかし、ガード下はあくまで仮の住居であり、人間らしく住むのには良い環境が必要であると思う。碁はやはり、「手談」でなければなるまい。

この手談という語が、最も身にしみて感じられるのは、外国へ行って碁を打つときである。こちらがうまい手を打つ。心の中で、

「どうです。うまい手でしょう。ちょっとお弱りになられたのと違いますか」
とニヤニヤする。相手も頭をかいて、

「弱ったなあ、日本のプロは恐ろしいことをやってくるわい」

と応じている。たまに向うが巧い手を打てば、こちらがウーン困ったという風情で二十秒ほども考えるフリをする。相手は、

「どんなもんだい」

という風に背を伸して大威張りである。こうして一時間か二時間お相手をするのだから、相手

の氣どころはもちろん、ときには性格まで分ってしまうことがある。この点、そこらあたりの易者さんよりはよほど確かで、アツという間に百年の知己ができてしまう。碁を知っている人の天与の恩恵だ。

まことに、碁は、それ自体がひとつの言語であると思う。何ひとつ外国語を知らなくても、お互いの意志が通じてしまうのだから奇々妙々。同じ岩波新書の千野栄一先生の本に『外国語上達法』という名著があるが、碁を覚えて外人の親友を作るのも、いちばん有効な方法のうちのひとつであると、余計なおせっかいをやいておきたい。

とはいえ、外国語は、知らないよりは知っている方がもちろん良い。英語、ドイツ語、フランス語、オランダ語、中国語、その他、何ゴであれ、イゴと相乗効果をもたらして、すばらしい成果を見るのは疑いない。

私の場合、ホンの少々だが英語をしゃべる。旧制中学の一年生だったとき、英語のリーダー巻の一を丸暗記させられて、四十年たった今でも丸暗記しているところを見ると、よほど英語の教師にいじめられたのだろう。しかし、日常会話はこれでだいたい用を弁じるし、シチョウ、アジ、などの囲碁用語は、そのまま日本語で通じる。何も無理をして、ラダー(Ladder)とかポテンシャルティ(potentiality)などと気取る必要もないから、年をとって外国語を度忘れしても

大丈夫である。

しかしながら、郷に入っては郷に従えという格言もあるので、私はなるべくその国の言語を学習し、用いることにしている。特に、チェコスロヴァキアみたいな小さい国に入ったときは、たとえあいさつだけでもチェコ語でやるとケタ違いに喜ばれる。大国では、たとえばイギリスで英語を用い、ドイツでドイツ語を用いても、それほど感激されない。先方は当然だという顔をしているし、ときにはヘタクソな英語だなど顔をしかめられぬ限りでもなからう。

チェコスロヴァキアは人口およそ千五百万。公用語はチェコ語の外にスロヴァキア語があるから、いよいよもって使う人は限られる。まさか、一旅行者の中年日本人がチェコ語を話すとも思えないから、相手はびっくり仰天するのである。

一九八三年の夏、私はプラハの日本大使館が提供してくれた自動車に乗って、毎日三百キロくらいずつ飛び歩いていた。

共産圏では原則として政治活動ができぬため、大鷹正大使以下、大使館員全員が文化活動に力を入れておられた。十名の館員中で、大使を含む四人が碁を知っておられたのはまことに幸運。いま改めて感謝する次第である。

特に、古市一等書記官は棋格三段。積極的にチェコ人の碁会に飛び入りをされ、折りたたみ

碁盤を寄付したりして、国際親善上、えらく喜ばれていた。古市さんがいるので、私は外交官を百人派遣するより、プロ棋士を一人常駐させる方が良いなどは決して言わない。

さて私は、首都プラハで三十人。ピルゼンで二十人。カルロビヴァリイで十五人。オロモウツで二十人という程度の碁打ちを集め、大碁盤での講演や、五面打ち（一人で五つの碁盤に向い、五人同時に相手をする）、十面打ちに大汗をかかされていた。

チェコ語は代名詞の格変化が七ツもあるというから、とてもじゃないが正しく使えるわけではない。こちらは、英語の三格でも苦しいのである。だから、こちらは単に単語を並べるだけだ。単々たるものである。

「一目の差もぐでしたか。実に残念でしたね」

と言いたいときは、

「イエデン、イエデン。シュコダ、シュコダ」

と情をこめて言う。イエデンは数字の一であり、シュコダは惜しまれるとか、残念とかいう語だそうなの。

すると相手は、

「ジェクイ、ジェクイ（ありがとう、ありがとう）」

と堅く握手。感謝感激、雨アラレという次第だ。言葉ひとつでこんなに喜ばれるのだから、ヘタクソでも何でも使わなけりゃ損である。

チェコ語では、お別れのあいさつは「ナスフレダノウ」である。チェコ人は几帳面すぎるくらいまじめな人が多く、私が碁を終って別れるときは、直立不動、一列に並んで「ナスフレダノウ」と手を振る。しかし、彼ら同士、あるいは夫婦、兄弟などの親しい間では、「アホイ」というのときに用いていた。日本人の私としては「阿呆い」みたいに聞えて、ちょっと面白かったが、これは、「じゃあね」とか、「あばよ」に当る、くだけた別れのあいさつであるらしい。

某日、私はその日の日程を終えて自動車に乗りこんだ。十人ほどのチェコ人が一列に並んで私を見送る。長い夏の陽も漸く西に傾き、十人の影が長い。

「ナスフレダノウ」(さようなら)

の聲に送られて車はソロリソロリと動き出した。私は十人の顔を次々に注目して手を振る。一碁一会。たった一日のおつきあいだった。今度、またいつ会えるだろうか。私はいささか感傷的になっていたが、発作的に窓から身を乗り出して、臆面もなく、

「アホイ」

と叫んだ。

次の瞬間、一同は、ナカヤマが何を言ったのか分らずシーンと静まり返ったが、さらに次の瞬間、十人の顔がゆがんでドッと爆笑が起った。

連中、列を乱し、足を踏み鳴らし、こぶしをふり上げ、口々にアホイ、アホイと怒鳴り出した。彼らの姿は徐々に遠ざかり行く。

いつしか、彼らのアホイは、一つの合唱になった。

「アホイ、アホイ」

というその声は、ほとんど地平線の向うに彼らが見えなくなるまで続いていた。通訳が、ソツと目をこすった。

思えば、このときチェコスロヴァキアの囲碁人口は僅かに三百人。二年後に三千人にしてくれたのは、実にこの人達、チェコの友人たちだった。私は、いつの日か、もう一度、

「ドブリーデン」(今日は)

と、かの国を訪ねたい。今度は、僅か十日ばかりでなく、できれば二か月ほど……。

さて、私の西洋囲碁事情はこれでおしまいである。棋士とは、縦横十九路の小宇宙を、一生涯さまよう旅人であると思うが、一旅行者となつて欧米各国を流れ歩いているとき、しみじみ

とその感を深くする。最後に、私は碁界の一浮浪児、一雲水として、一つの散文詩(のつもり)をつけ加えて困碁の国際普及関係の方々に訴えたい。

昔、キリシタンの宣教師たちは、

万里の波濤を乗り越えて、

極東の島国までやってきた。

いま、碁の布教士たちが、

世界平和のために、

人類を兄弟とするために大空を飛んで行く。

この平和の使徒たちが、

ヨーロッパの、アメリカの大地を、

すみずみまで歩くのは、いつの日であろうか。

地球に平和を……。

世界に碁を……。